

研究課題名	【Web 会議番号 2019_12】 重症鶏卵アレルギー児に対する経口免疫療法ランダム化比較試験：炒り卵 vs 加熱卵粉末
フリガナ	ナガクラ ケンイチ
代表者名	永倉 顕一
所属機関（機関名） （役職名）	国立病院機構相模原病院小児科 医師
本助成金による発表論文，学会発表	当初の計画通りに研究開始 12 ヶ月時までのフォローを実施して評価完了後は、日本アレルギー学会、日本小児アレルギー学会、世界アレルギー学会、ヨーロッパアレルギー学会での学会発表、Journal of Allergy and Clinical Immunology: In Practice、Pediatric Allergy and Immunology、Allergology International への論文投稿を予定している。

研究結果要約

<背景>

重症鶏卵アレルギー児は耐性獲得しにくく、既存の経口免疫療法(OIT)より安全な OIT の確立が望まれている。

<目的・方法>

安全かつ効率的な OIT の確立を目的として「加熱鶏卵粉末を用いた OIT で脱感作へ導入しその後炒り卵を用いた OIT へ変更すると、より安全かつ効率的に耐性獲得へ誘導できる」と仮説を立てた。対象を炒り卵群 or 鶏卵粉末群に無作為に分け、主要評価項目を 12 ヶ月時の耐性獲得とした。

<結果>

2019年6月までに研究体制の整備、倫理委員会の承認、UMIN登録を終了し、2019年7月から症例登録を開始した。2020年4月時点で13例（炒り卵群：6例、鶏卵粉末群7例）を登録しフォロー中（フォロー期間0-6ヶ月）である。研究開始時の年齢（炒り卵群 vs 鶏卵粉末群、以下中央値）は7.8歳 vs 8.8歳、鶏卵アナフィラキシーの既往は100% vs 71%、卵白/卵黄/オボムコイド特異的IgE値は38.9/17.5/21.0 kUA/L vs 12.1/5.4/9.2 kUA/Lであった。炒り卵群は全例が炒り卵の初回摂取を無症状で完了した。現時点でフォロー出来ている範囲での自宅での副反応の頻度は、中等症は1.3% vs 0%、重症は0%であった。重篤な有害事象、脱落は両群ともに0例であった。

<今後の予定>

当初の計画通りに研究継続し、目標症例(46例)に向けて新規登録を継続する。